

ラオス人民共和国への農業支援 2015年 2月 2日～8日

埼玉県春日部農民連・GP農法研究会は、ラオス人民共和国南部の一村一品プロジェクトの要請で、ラオス人民共和国の農業支援を中心とする海外支援活動を行いました。今年には2013年に国連で定められた「国際土壌年」です。FAO（国際食糧農業機関）は地球規模で耕作地が土壌劣化をきたしていると公表しました。農薬や化学肥料の永年にわたる使用が原因です。長い間、有機農法にとりくんでいるラオス農業は、まさに「国際土壌年」にふさわしい取り組みをしており世界の農業の先端を行くものになると確信しました。

先ず、「GP農法」で使用するセラミックを製造依頼してある陶器所を訪問したあと、ラオス・サバナケットにある国立農業試験場にプータイラ農学博士を尋ねました。旧ソ連に留学した博士は、有機農法（オーガニック農法）を農民に指導している中心的存在です。

GP農法研究会が支援したい農法は、同じ有機農法でも土着の微生物を現在の数万倍にパワーアップした「GP農法」（元気パワー農法）です。日本においても各種の有機農法でもとてもそのレベルまで微生物の活性化はできていません。「GP農法」の理論は、中国で4000年前につくられた「漢方薬のバイブル書」である「神農本草経」にあり、一般的な「窒素、リン酸、カリ農業理論」ではなく「漢方薬理論農法」であること、その農法の資材として、「セラミック」や「雑草エキス」が必要であること、また、GP農法で栽培した米、野菜は「抗酸化性」が非常に高いこと、人参の「抗酸化性」のテストも行い博士に説明しました。

博士は、「GP農法は自分たちが取り組んでいる有機農法よりレベルが高い」「ハイ・オーガニック」であることを即座に理解したようでした。その後、直ちにGP農法資材「雑草エキス」を仕込み、新しい実践に挑戦はじめました。

灌漑施設を持った他の2か所も視察しました。いずれも有機農法ですが、農民の方々は「GP農法」の優位性に驚いていました。

一村一品プロジェクトはラオスの農業が米や野菜に加えて、「GP農法」でイチゴやトマトの栽培が成功し、大いに市場を広げて外貨を稼ぎ、農村が豊かになることを目指して援助したい、と今後の活動に大きな期待を寄せています。

またプロジェクトから農業を学ぶ青年を日本に留学させたい旨の要望があり、日本語学校の紹介もありました。全国農民運動連合会（全国農民連）がその受け皿になってもらえればとの要請も受けました。いずれ、本部とも相談することにします。

G P農法研究会は、G P農法がラオスで成功することを願っています。

タイからも「G P農法」普及の要請があり、国家プロジェクトとして立ち上げる予定だそうです。

ラオスでG P農法が成功すれば、日本に相当なインパクトを与えたいと思います。将来は農薬・化学肥料が不要になる農業ですから、強い抵抗があるでしょう。

しかし、日本は戦後70年の間、窒素、リン酸、カリ農法が食糧増産に大きな役割を果たしてきましたが、今日、農薬や化学肥料の影響で特に野菜生産地が土壌劣化を起こしつつあり根こぶ病、連作障害などの障害で耕作地を転地するなど事態は深刻です。農水省はこうした状況をみて「減農法」を奨励しています。つまり「農薬・化学肥料の使用量は現行農法の50%減」で「特別栽培農産物」として認めるといふものです。農薬と化学肥料の使用量を減らしても根本的解決にはならないことは自明の理です。

2015年2月11日

埼玉農民連春日部支部・G P農法研究会

高橋利男